

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13550

研究課題名（和文）オスマン帝国における文化的選良層の社会生活と美意識の変遷についての社会史研究

研究課題名（英文）Writing Culture in the Ottoman Empire: A Study of the Social and Aesthetic Changes in Ottoman Cultural Elites

研究代表者

宮下 遼 (Miyashita, Ryo)

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・准教授

研究者番号：00736069

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、オスマン帝国の文化を担った「文化的選良層」という独自の研究対象を設定し、これを前近代から近代（16世紀～19世紀）にかけてのその社会的変化及び美意識の変遷という観点から分析することで、伝統文化の西欧化／近代化過程の実態を詳らかにしようとした研究である。四年間の研究期間を経て、西欧文化の移入によって伝統文化の客体化が起こったという従来の文化史的な見方とは相反する事例を炙り出しつつ、少なくとも文学的美意識の範疇においては、トルコでは「伝統的」と見なされた文化群が、民族文化、宗教文化、国家文化（オスマンの文化）、西欧的ないし先進的と再発見された部分への分割が生じた過程が明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代以降、伝統的社会における文化の在り方は、大なり小なり「西欧化」の外的影響により変化を被った。オスマン帝国の「伝統文化」は、一時はイスタンブールを絶対的中心とした一大文化圏を築きながらも、近代に入り急速に周縁化した点で興味深い研究対象である。本研究はオスマン帝国における「文化」が民族文化（トルコ文化）、宗教文化（イスラーム文化）、国家的文化（オスマンの文化）等に分離されていった過程を示しつつ、「伝統文化」と総称されるものがそもそも分有的状態に留め置かれたオスマン社会の特異性と、「分有的文化モデル」という新たな文化様態モデルの存在を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study sets up a unique research subject, the "Ottoman cultural elites" that was responsible for the literary culture of the Empire, and analyzes it from the perspective of social and aesthetic changes from the pre-modern to the modern period (16th to 19th centuries) in order to elucidate the reality of the process of westernization/modernization of traditional culture. This is a study of the process of westernization/modernization of traditional culture. After four years of research, I have uncovered cases that contradict the conventional cultural history view that the introduction of Western culture has led to the objectification of traditional culture. It also revealed the process by which the culture group considered "traditional" in Turkey, at least in the category of literary aesthetics, was divided into ethnic culture, religious culture, national culture (Ottoman culture), and parts that were rediscovered as Western or advanced.

研究分野：トルコ社会史

キーワード：トルコ史 トルコ文学 トルコ文化史 東洋史 地中海文化 ディーワーン詩 トルコ近代文学

1. 研究開始当初の背景

19世紀以降、非西欧文化圏における伝統文化・芸術は、西欧化/近代化の影響の下、大きな変容を経験した。地球規模で進んだ西欧化/近代化という社会的・文化的現象について考察する際に、ルネサンス期からおおよそ19世紀の近代化期にかけての地中海文化圏が重要な研究対象となることは論を俟たない。何故ならばまさにこの時期、西欧において人文主義、宗教改革という文化的、思想的潮流が勃興し、また大航海時代と総称される対外的積極性を軸とする経済活動が進行することで、技術的、経済的、そして思想的に近代への下地が整えられたからである。一方、同時期の東地中海に目を転じれば1299年にアナトリア北西部で建国し、1453年のイスタンブル征服以降、1922年に至るまで東地中海圏・イスラーム文化圏の超大国としてこの地域の大半を支配したオスマン帝国が、スレイマン1世期(1522-66年)を通じて軍事的、経済的、なによりも文化的に躍進を遂げ、独自の文化圏を築くに至っていた。そして、このオスマン帝国こそが18世紀以降、特に19世紀に入ってからイスラーム文化圏の退潮を体現し、西欧化/近代化に関わるあらゆる問題への対処を余儀なくされ、やがて帝国の限界そのものが伝統的イスラーム文化圏のそれとほぼ同一視された末に1922年、滅びることとなる。つまるところ、地中海文化圏は近代という時代の揺籃の地としても、また非西欧圏における西欧化/近代化による伝統文化の変容が最初に経験された淵源地としても、世界史上において極めて高い重要性を持つと言えるだろう。

当然ながら、オスマン帝国についての研究は国内外を問わずに広く行われている。近代化の開始される1839年以前の前近代期を扱うトルコ史研究においては国家制度史・社会経済史研究がその主流を成して優れた研究成果がもたらされた反面、社会経済史の発展という研究潮流の中で王朝正史や政治的論考を除く叙述史料、とくに韻律詩を中心とするトルコ古典文学史料に大きな関心が払われず、歴史研究と文学研究の間で史料・成果共有が積極的には行われなかったという、乖離的な研究状況も見られた。

一方、世界でも最初期に本格的な西欧化に着手したオスマン帝国近代期(1839-1922)については教育史、科学史、あるいは社会・宗教思想史、出版文化史など様々な角度から研究が行われて、とくに我が国の研究者たちによって特筆すべき数々の成果がもたらされたのであるが、前近代には帝国において芸術の主流を為し、また雅人として必須の教養であり、王朝人士の社会上昇に大きな影響力を持った韻律詩が主たる考察対象とされることはなかった。

この背景にはそもそも高い典故性と選良性を特徴とする芸術であるトルコ古典詩が、近代以降には退潮し、トルコ共和国においてはその文学的伝統はアンシャン・レジム期の反進歩的知識体系と見做されたという政治的背景があるのも勿論であるが、トルコ文学(史)における研究手法上の二つの問題もまた看過しえない影響を及ぼした。すなわち、第1に1839年以前の時代を扱う「ディーワーン文学研究者」の間では、古典詩の史料残存状況の把握とその体系化の作業、及び未発見の詩作品の発見と校訂、出版が主たる研究手法とされる一方、他方では1839年以降に詠まれた古典詩の研究は専門領域外に置かれ、その分析は専ら「近現代トルコ文学研究者」に委ねられたのである。第2に、初期の「近現代トルコ文学研究者」の主たる関心は、19世紀半ばに非西欧圏では最も初期に移入された西欧的な散文小説の分析に向けられ、反比例的に韻律詩への関心が制限されたこと

も、こうした状況に拍車をかけたと言えるだろう。例えば自らも詩人として近代詩の先駆者となったヤフヤー・ケマルの薫陶を受け、トルコ初の近代文学の専門家となったタンブナルのような研究者にもこうした姿勢が顕著であった。以上のように、西欧化/近代化の開始された1839年を境とする歴史学における時代区分が、無条件に受け入れられた結果として、トルコ文学研究においては研究者養成方法にはじまり対象研究時期はもとより、使用史料に至るまでのある種の断片化現象が見られるのである。

こうした状況を踏まえ研究遂行者はオスマン帝国の芸術・文化の屋台骨を担いながらも、歴史学に援用されることの少なかったトルコ古典詩を筆頭とするトルコ古典文学史料を中心史料として用いながら、オスマン帝国の詩人たちの社会生活、及び彼らの集った帝都イスタンブルについての都市史研究を行い、一貫してトルコ古典文学史料のトルコ社会史・心性史研究における有用性を主張してきた一連の研究を通じて、本研究の要ともなる「文化的選良層」という新たな分析軸の着想を得るに至った。

従来の研究においては、オスマン語を操り国家から俸給を受けとるムスリムから成る支配階層(askerî)、及び納税義務を負いムスリム、非ムスリムが混在する被支配階層(reayâ)という峻別的な二つの社会階層から成る二元的なオスマン社会観が研究の主軸を為してきたが、実のところこの見方は、文化的な視座から見た際には高い流動性を持つこの社会の実態と完全には一致しない。これに対して申請者は、当時の社会上層部、および上層への上昇を志向する被支配階層の間で韻律詩がほぼ必須の教養として機能した点に着目しつつ、「詩作能力を有し、古典詩を賞味し得る教養を備えた者」としての「文化的選良層」(cultural elites, kültürel seçkinler)という、社会身分という国家制度的指標ではなく、当時の社会で広く共有された文化的指標を新たな分析軸として設定する。これは「文化的選良層」という従来研究の枠にとられない人的対象の設定が、従来は併用されることの少なかった史料群の比較と再検討を可能とし、先述のトルコ歴史研究における社会史・心性史研究の立ち遅れ、及びトルコ文学研究における歴史学的時代区分によって生じた史料、研究対象の断片化現象の双方を、学問的裏付けと共に克服し得ることを証明することができるという確信に基づいてのことである。

かくのごとき新たな分析軸を導入した上で、本研究「オスマン帝国における文化的選良層の社会生活と美意識の変遷についての社会史研究」は、600年にわたって地中海、イスラーム文化圏において大国の地位を占めたオスマン帝国において、前近代から近代化期にかけての長期間、その文化・芸術の主たる担い手となったこの「文化的選良層」の社会生活と伝統的美意識・叙法双方の様態、及び経年的変遷を総合的に検討することで、非西欧文化圏における伝統文化の変容を実証的に明らかにすることを最終目標とした。

2. 研究の目的

上記のように本研究は、王朝初期から滅亡に至るまで帝国の人々の美意識の根幹を為したトルコ古典詩(ディーワーン詩とも)を筆頭に、伝記、書簡集、詩論という散文史料をも含むトルコ古典文学史料を用いながら、前近代から近代化期(1453-1922年)のオスマン帝国において、その文化・芸術の主たる担い手を務めたオスマン詩人という人間集団の実態、その社会生活、地位の変遷と、伝統的美意識・叙法の変遷という物心両面から考察することで、非西欧文化圏における伝統文化の継続と変容の実態を総合的に明らかにする社会史研究である。

3. 研究の方法

本研究の目的は、オスマン帝国において前近代から近代化期にかけての長きにわたりその文化・芸術の主たる担い手と見做された詩人たちの実態を、社会生活・社会的地位とその変遷という社会生活者としての側面、伝統的美意識・叙法の経年的変遷という芸術家としての側面の両面から総合的に明らかにすることである。具体的には、
・「文化的選良」の社会的地位、
・メディアとしての古典詩：「前近代イスタンブル文壇における詩の献呈と立身」、「選良から民衆へ：近代における詩の受容者の変容」、
・文化的選良層の美意識と叙法の変容：「抒情詩における詩題変遷」、「言語的美意識の変容：トルコ語の美の系譜」、「音声的美意識の変容：韻律から音節へ」という3段階、6研究項目を4ヵ年計画で行われた。

4. 研究成果

研究期間を通じておおむね、予定した研究を行い、以下のような大要的結論を得るに至った。すなわち、近代以降、伝統的社会における文化の在り方は、大なり小なり「西欧化」の外的影響により変化を被った。オスマン帝国の「伝統文化」は、一時はイスタンブルを絶対的中心とした一大文化圏を築きながらも、近代に入り急速に周縁化した点で興味深い研究対象である。本研究はオスマン帝国における「文化」が民族文化（トルコ文化）、宗教文化（イスラーム文化）、国家的文化（オスマンの文化）等に分離されていった過程を示しつつ、「伝統文化」と総称されるものがそもそも分有的状態に留め置かれたオスマン社会の特殊性と、「分有的文化モデル」という新たな文化様態モデルの存在を指摘した。

以下に公刊・発表された研究成果を列挙する。

< 著書 >

（単著）宮下遼『トルコ語』大阪大学出版会, 2021.

（単著）宮下遼『多元性の都市イスタンブル：近世オスマン帝都の都市空間と詩人、庶民、異邦人』大阪大学出版会, 2018年2月28日.

< 論文 >

（論文）宮下遼「民間信仰を売る：トルコの邪視除け護符ナザル・ボンジュウ」『この世のキワ：自然の内と外』勉誠出版, 2019, pp. 308-321.

（論文）Ryō Miyashita, “Translating the Turkish Personal Pronoun “Ben” into Japanese Role Languages,” *Shaping The Field of Translation: In Japanese ↔ Turkish Contexts*, Vol.1, E. Esen and R. Miyashita(eds.), Berlin, Peter Lang, 2019, pp. 85-106.

（論文）Ryō Miyashita, “Translating the Phonetic Elements of Divan Poetry into a Japanese Syllabic Poem Using Kundoku,” *Shaping The Field of Translation: In Japanese ↔ Turkish Contexts*, Vol.2, R. Miyashita and E. Esen (eds.), Berlin, Peter Lang, 2019, pp. 85-101.

（論文）宮下遼「《脱トルコ化》する物語：21世紀、トルコ・ポストモダニズム小説における「祖国」の解体」『ワタン（祖国）とは何か：中東現代文学における Watan/Homeland 表象』中東現代文学研究会, 2018.

（研究ノート）“Mon nom est Mr. Watashi,” *Cahier de l’Herne Orhan Pamuk*, pp. 107-114, 2017.

< 訳書 >

（訳書）オルハン・パムク『赤い髪の女』宮下遼訳、早川書房, 2019.

< 翻訳 >

（単訳）イェクタ・コパン「ポルトベロ通り 22 番地」『すばる』2018年5月号、集英社, pp.

< 口頭発表 >

- (研究発表)宮下遼「オルハン・パムク『無垢の博物館』における破滅と慰撫：イスタンブールの都市記憶と事物の愛の関連性について」世界文学会、「崩壊と世界文学」第1回連続研究会、於オンライン, 2021年12月12日.
- (研究発表)「トルコ小説における父なし子：パムク『赤い髪の子』」中東現代文学研究会@京都大学, 2021年1月12日.
- (講演)宮下遼「文学的題材としてのトルコ史の諸相：トルコ歴史小説小史」中東現代文学研究会公開講演会於京都大学, 2021年1月11日.
- (講演)「アジア文学の誘い@チェッコリー第11回『赤い髪の子』」於チェッコリー(東京神保町), 倉本さおり, 長瀬海, 宮下遼, 2020年2月22日.
- (講演)宮下遼「世界帝都を夢見る街イスタンブール：都市の記憶を歩く」NPO文化のとまり木主催於エル大阪, 2019年11月20日.
- (講演)Ryō Miyashita, “Japonya’da Türk Edebiyatı Araştırmaları ve Çevirisi,” 4. Türkiye’de Japonya Çalışmaları Konferansı(JAD), Boğaziçi Üniversitesi, İstanbul, 28-29. 6. 2019.
- (講演)宮下遼「世界帝都の夢を見る街：「ルームの地」の文学をめぐって」(地中海トーキング「港町：交流と創造」)第43回地中海学会大会於神戸大学, 2019年6月8日.
- (講演)宮下遼「文学の都市イスタンブールの盛衰：現代トルコ文学の淵源としての都市像を読み解く」於ユヌス・エムレ文化センター(東京), 2018年11月17日.
- (研究発表)宮下遼「『タラトとフィットナトの恋』の語りと「国語」創出の試行」, 「近現代トルコ語、ペルシア語文学の展開：韻文と散文、口語と文語、翻訳と創作(トルコ文学研究会 第7回定例研究会)」東京外国語大学本郷サテライト, 2018年8月19日於.
- (講演)宮下遼「外国語の詩を訳すということ：トルコ文学の場合」『大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム 第3回「大阪大学外国語学部がめざす外国学～言葉とともに、箕面とともに」』於箕面市メイプルホール, 2018年3月1日.
- (講演)藤井光, 谷崎由依, 宮下遼「『文芸翻訳入門』(フィルムアート社)刊行記念トークイベント」於 Montag Booksellers (京都), 2017年4月28日.
- (研究発表)宮下遼「オスマン詩におけるアリー表象：非アレヴィー・ベクタシー詩人を中心に」アレヴィー・ベクタシー研究会, 於大阪国際大学, 2017年3月27日.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ryo Miyashita	4. 巻 1
2. 論文標題 Translating the Turkish Personal Pronoun “ Ben ” into Japanese Role Languages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Shaping The Field of Translation: In Japanese Turkish Contexts, Vol. 1	6. 最初と最後の頁 85-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b15594	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Ryo Miyashita	4. 巻 2
2. 論文標題 Translating the Phonetic Elements of Divan Poetry into a Japanese Syllabic Poem Using Kundoku	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Shaping The Field of Translation: In Japanese Turkish Contexts, Vol. 2	6. 最初と最後の頁 85-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b15594	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 宮下遼	4. 巻 1
2. 論文標題 民間信仰を売る：トルコの邪視除け護符ナザル・ボンジュウ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『この世のキワ： 自然の内と外』	6. 最初と最後の頁 308-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 6件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Ryo Miyashita
2. 発表標題 Japonya ' da Turk Edebiyati Arastirmalari ve Cevirisi
3. 学会等名 JAPANESE STUDIES IN TURKEY CONFERENCE（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 文学的題材としてのトルコ史の諸相：トルコ歴史小説小史
3. 学会等名 中東現代文学研究会公開講演会於京都大学（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 トルコ小説における父なし子：パムク『赤い髪の女』
3. 学会等名 中東現代文学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 世界帝都の夢を見る街：「ルームの地」の文学をめぐって
3. 学会等名 地中海学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 文学の都市イスタンブルの盛衰：現代トルコ文学の淵源としての都市像を読み解く
3. 学会等名 日本トルコ交流協会第22回講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 『タラートとフィットナトの恋』の語りと「国語」創出の試行
3. 学会等名 トルコ文学研究会第7回定例研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 「外国語の詩を訳すということ：トルコ文学の場合」
3. 学会等名 大阪大学懐徳堂（招待講演）
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 トルコ小説における父なし子：パムク『赤い髪の子』
3. 学会等名 中東現代文学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 「オルハン・パムク『無垢の博物館』における破滅と慰撫：イスタンブールの都市記憶と事物の愛の関連性について」
3. 学会等名 世界文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮下 遼
2. 発表標題 文学的題材としてのトルコ史の諸相：トルコ歴史小説小史
3. 学会等名 中東現代文学研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Esin Esen and Ryo Miyashita (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 262
3. 書名 Shaping The Field of Translation: In Japanese - Turkish Contexts Vol. 1	

1. 著者名 Ryo Miyashita and Esin Esen (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 235
3. 書名 Shaping The Field of Translation: In Japanese - Turkish Contexts Vol. 2	

1. 著者名 オルハン・パムク（著）宮下遼（訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 早川書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 赤い髪の女	

1. 著者名 宮下 遼	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 436
3. 書名 多元性の都市イスタンブル	

1. 著者名 藤井光	4. 発行年 2017年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 276
3. 書名 文芸翻訳入門 言葉を紡ぎ直す人たち、世界を紡ぎ直す言葉たち	

1. 著者名 宮下遼	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 324
3. 書名 トルコ語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------